

ヨハネス・タウラー覚え書き — ドイツ14世紀前半、危機の時代への一瞥 —

Notiz zu Johannes Tauler

— *Ein flüchtiger Blick auf die Krisenzeit der ersten Hälfte von 14. Jahrhundert Deutschlands* —

橋本 裕明 *HASHIMOTO Hiroaki*
(芸術学部)

はじめに

ヨハネス・タウラー (Johannes Tauler, 1300-1361) は14世紀の30～50年代にかけて説教家として活躍したドミニコ会の神父であった。彼はシュトラースブルク市の修道院で起居し、多くの会士と共同生活を送っていたが、市内外での信徒の霊的指導をも精力的に行った。説教の中では「レーバマイスター」(lebemeister)¹⁾という言葉を用いたが、彼自身が、人生をいかに生きるべきかを説いた教師であったといつてよい²⁾。ドミニコ会は当時、他の托鉢修道会であるフランシスコ会とともに、アヴィニオン教皇庁から、勢いを増す異端運動に女子修道会員らが傾斜することがないようにと、保護の任務をうけていた。タウラーもドミニコ会士として、その使命を忠実に守って熱心に活動していた。彼が司牧(霊的指導)したのは、説教からすると、女子ドミニコ会員だけでなかった。ベギン(やベガルド)、「神の友」(gotesvriunt)の共同体のメンバーなど、霊的な深まりを目指して純粋な信仰生活を送ろうとしている人々も、その対象であった。ときには一般信徒が聴衆の中にいる場合もあったが、タウラーはむしろ信仰面での深化を目指している修道者に焦点を絞っていたといえる。彼はその意味では、民衆の説教家というよりも霊的進歩者のための説教家であり、彼らのために、修道会司祭として一切をなげうち、その神秘主義上の教導に専念したのである。タウラーは自著を残すことはなかったが、説教の中で新約聖書の福音を深く大胆に読み解き、その内容を聴衆に懇切に伝えることで、大きな精神的影響を及ぼした。彼の説教の写本は生前に完成しており³⁾、おそらく幾多の修道院で回し読みされ、その全体か一部は写書されたにちがいない。タウラーのメッセージとは、イエス・キリストに真に信従しようと思う人間は、まずは自分の魂の汚染の実態を見きわめて浄化の道を歩み出す決意をし、その上で、聖霊のはたらきを受けながら浄化の修練を積極的に行うべきであるというものであり、それには〈神と魂との合一〉という最終目標たる至福

1) 本稿でのタウラー説教の引用は、Ferdinand Vetter (hg), *Die Predigten Taulers*, Berlin / Zürich / Dublin 1968 (Berlin 1910)による。なお中高ドイツ語の表記は、同書の索引に従う。

2) これに対立する語として、タウラーは「レーゼマイスター」(lesemeister)を挙げている。これはさしずめ聖書学者や神学者だといつてよからう。

3) タウラーの死の2年前の1359年に、エンゲルバルク写本が編まれている。

がイムプリシットに含まれていた。タワーの説教は、具体的にいえば、ルネッサンス的傾向を示すように「聴衆一人ひとりに語りかけ、彼らの魂の状態をその深層に至るまで明らかにし、その墮落の実態を精確に分析して病巣を鋭くえぐり出し、その上で治癒の処方提示するものであった。そのさい彼は何度も、神と魂の神秘的合一の事態を、聖書や日常生活のさまざまな比喻や、ときには偽ディオニシオス・アレオパギタなどの表現を用いて語っているが、そうした「幸いなる体験」に至る以前の修練の意味と方法を説明することに全力を尽くした。その教導は彼の信仰体験上の確信にもとづいており、厳しくとも思いやりに溢れたものであった。司牧上の効果の点からすれば、おそらくエックハルトやゾイゼよりも、具体的な修練の指導に心をくれたタワーに軍配が上がるといえるだろう。この篤実な人物の説教は、緻密な心理的分析にもとづいて諸徳の実践を勧めるという、いわば倫理的な性格を示している。

このようにタワーの説教は、何よりも、信仰的完成を目標として霊的な道りを歩んでいる〈広義の修道者〉を対象として、その修練をあくまでも具体的に指導するという点に集中し、その実践面を特徴としている。それゆえ説教には、当時の社会や市井の人々が抱える現実的な諸問題を取り上げて、それに対して助言や指導を行う、いわば民衆向きの姿勢は薄いといわなければならない（14世紀のドイツ神秘主義はこうした高踏的立場ゆえに、次世紀にはその影響力を弱めることになった⁴⁾）。しかし彼が生きた14世紀の前半の（とくに中葉に近い）時期は、教皇と皇帝に代表される聖俗両権力間の激しい抗争が続き、さらには自然災害や疫病の蔓延などが度重なって、絶望や恐怖が社会全体をおおい、人々には〈終末〉が迫っているように見えた。タワー自身も同時代を生きてはいたが、その説教には、後にとり上げる在俗司祭ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲン（Heinrich von Nördlingen）の場合とはちがって、この危機の時代についての言やや評価がほとんど見られない。世情にはさほど関心を持っていないかのように、われわれの説教家は沈黙している。これをどう考えればよいのであろうか。タワーは現世をすでに切り捨てていたのか。そうではないと思われる。タワーは常に説教の中で、まさしく神の国への門は一人ひとりの日常生活のただ中にご見いだすべきだと、はっきりと指摘しているからである。おそらく彼はいかなる社会的現実も、それがいかに悲惨なものであれ、世の無常を示す一時的な現象であることを知って、それらに心を奪われるのではなく、むしろその内に神の摂理を読みとり、神をひたすら信じて過酷な生活に耐え、神との合一を目指して魂を浄化するようにと教えたのであろう。この第一義ゆえに、世情の個々の出来事に言及することがなかったのだと思われる。

ただしそれでも、説教にはわずかながら、同時代的発言を行っていると読める箇所が見

4) ドイツ神秘主義の思想史的影響はもちろん途絶えたわけではない。タワーに限って言えば、後年カトリックではアヴィラのテレジア、十字架のヨハネ、十字架のパウロなど、プロテスタントでもルターや、敬虔主義のゲルハルト・テルステーゲン、ヨハン・アルント、アウグスト・ヘルマン・フランケ、ヤーコブ・シュペーナーなどがタワーの霊性から学んでいる。

受けられる。自らの身分である聖職者の立場から、アヴィニヨン教皇庁の政策を暗然と批判していると思われる箇所である。それはフェッター版（全81編）第55テキスト——もともとはエンゲルベルク写本124に20番目として収録された説教——である。われわれはこれを、タウラーの対社会的なスタンスを示す貴重な一面ととらえて、本稿で考察してみたいと思う。

本稿のⅠでは、この説教を全訳する（正楷書体の部分）。そのさい説教の訳文の段落には、フェッター版の段落区分に従って番号①～⑩をつける。また訳文は、説教がミサの最中に聴衆に向けて口頭で行われていることから、その雰囲気を生かして「です・ます」調とする。そして内容を読み解きながら、タウラー神父の時代批判について検討したい。

さらにⅡでは、タウラーと親交の深かったハインリヒ・フォン・ネルトリングンが、女子ドミニコ会の神秘家であったマルガレーテ・エプナー（Margarete Ebner）に宛てて書いた、バーゼル発の1348年の手紙⁵⁾からその一部分を訳出し（同じく正楷書体）、当時の状況を一瞥してみたい。

Ⅰ. 第55テキストの訳と解説

題名「私に従いなさい。すると彼は全てを捨てて、主に従った。」(Sequere me! at ille relictis omnibus secutus est eum.) は、マタイの9章9節とルカの5章28節から構成されており、本テキストはこの合成句にもとづく神秘主義的説教である。タウラーの神秘主義の特徴は、神の第二のペルソナの受肉体であるイエス・キリストの無私の生を、聴衆が自己の魂を根本から浄化する道程において追体験しうるように促すことを目標としているといえる。端的に言えば、神と合一するための〈我意の克服〉である。

- ① 主は聖マタイに「私に従いなさい」(volge mir) と言われました。すると彼は全てを捨てて主に従いました。
- ② この愛すべき聖人はすべての人間の模範(exemplar) でした。聖書にあるように、彼はもともと大変な罪びと(ein grosser sündler) でしたが、主が内面のグルントで(in dem grunt) 語られたために、神の最大の友の一人となりました。彼は全てのを捨てて主に従ったのです。神に従うことで何もかもが決まります。そのためには何であれ、神でない全ての事物は完全に、真実に放棄しなければなりません。その意味は、何であれ、生きたものであれ死んだものであれ、自分自身であれ所有物であれ、人間のグルント(grunt) を占有しているものを見つけたら、それを捨てるということです。それは、神

5) Philipp Strauch (hg), *Margareta Ebner und Heinrich von Nördlingen*, Freiburg I/B. und Tübingen, 1882. を用いた。

が心を愛する方 (ein minner der herzen) であり、神が大切にされるものは外的なもの (das uswendig) ではなく、内面の生きた同意 (gunst) だからです。人間がその行為ゆえに、どの場において誰と一緒にあっても、神と徳に関するものに常に対応しうる用意があるなら、その態度は、全ての人間が祈るのと同じ回数だけ祈り、天に届くほどの大きな声で歌い、形ばかりの断食や徹夜、その他のことを行ったりするよりも、価値があります。

福音書のマタイは徴税人であるが、タウラーは彼を「大変な罪びと」だと考えている。彼を罪びとと断定する根拠はどこにあるのか。タウラーが誕生する少し前に、同じドミニコ修道会のヤコブス・デ・ヴォラギネは『聖人伝説』(Legenda Aurea, 1263-88) を著した。これは聖書正典内外の多くの聖人譚を集成したもので、後に西洋文化に深い影響を及ぼす宗教文学的源泉となるが、タウラーも当然これを読んでいたらと推測される。ヴォラギネはその中で、このマタイについて項目を設けて長文で紹介している。それによれば、マタイは偽魔術師を斥けて籠を退治し、エジプト王の王子を死から蘇らせ、その民の多くをキリスト教徒に改宗させた人物である。しかしやがてエジプト王の行状を批判したために、王の不興を買って殺され、殉教した。この内容は聖書が語らない伝説であり、タウラーは説教には採用しなかった。ただタウラーは、ヴォラギネが強調しているその他の点、すなわち、マタイが罪びとであるのはその徴税人という職業ゆえであったという考えを共通理解としている。徴税人は、ローマ帝国から求められる関税を徴収する仲介役を果たしており、同胞のユダヤ人からとった金額の上前をはね、私腹をこらしていたために嫌われ、罪びとのように扱われていたという事実をふまえているのであろう。

タウラーは、マタイの「内面のグルント」(=魂の根底) でイエスが語ることで回心の事態が起ったとするが、福音書自体はそうした心理学的解釈を行ってはいない。魂内でのキリストによる接触は、この説教家自身の解釈であり、最初から〈内面を凝視していく〉方向性が示されている。説教は以後、この霊性の問題を扱っていく。

タウラーはこのマタイに〈従順〉と〈放棄〉の模範を見ているが、これはヴォラギネが指摘する四つの徳の第一番目に相当するといえるであろう⁶⁾。外的・内的を問わず、神と関わりのないものは全て放棄するという霊性的態度、これこそ最も重要なものである。信心業の実践に傾ける熱心も——それには回数の多さも含まれる——その意味では相対化されている。

6) 第一は「速やかな従順」(obedientiae velocitas)、第二は「寛大さまたは親切」(largitas sive liberalitas)、第三は「謙虚」(humilitas)、そして最後に、大きな罪である自分の貪欲と神の赦しを描き出したことで得られた「大いなる威儀」(magna sollemnitas) である。ただし、徴税人のマタイが福音記者であったことは、学問的に証明されていない。Vgl. Jacobi a Voragine, *Legenda Aurea*, hg. v. Dr. Th. Graesse, Osnabrück 1969 (1890), pp. 625-626.

③ところで主は「私に従いなさい」と言われました。人間は六つの点で主に従うものです。その三つとは低次の諸能力にあり、他の三つは高次の諸能力にあります。低次のものには謙遜 (demuetikeit) と柔和 (senftmuetikeit) と忍耐 (gedult) があります。残りの三つは、これら全ての能力を超えています。それは信仰 (gelovbe)、希望 (zuoversiht)、愛 (minne) です。

タウラーはここで、敬虔な人間が現世の生活を送るにあたって求められる生き方と、神に対して抱くべき徳を考える。後者は、スコラ学が「神によって人間の心に注ぎ入れられ、人間を直接に神と関係づける」⁷⁾ものと定義して、重視する〈対神徳〉(virtutes theologicae) である。キリストへの信徒とは、これらの徳において修練することを意味する。ちなみに前者の三徳は後者のそれと関連している、と後にタウラーはいう。

④ さて主は「従いなさい」と言われました。「従う」とは、愛すべき模範である主に願い、感謝し、主を賛美することです。もう一つの意味は、さらに完全な道を歩むという仕方です。この道を歩む人間は、けっして最初の仕方では従わず、黙想にも何にもとられることなく、ゲミュエテ (gemuete) を内へと向け、魂の内自分で自分を完全に放棄して、静かに黙します。そして自分の内面で、神が好まれるもの、あるいは神の御旨にかなう最も純粋で完全なものに従いつつ、神ご自身のはたらきをじっと待っています。ある人間は実際のところ、外的に修練することで満足しきっており、その修練は体に沁み込んでいます。それは祈りであれ断食であれ徹夜であれ、どんなものにも当てはまります。彼はそれから十分な快 (lust) を得ていますが、神はそうした修練にはほとんど関わられません。その快が実に善いものに見えようとも、神はそれとは関わられず、それどころか背を向けてしまわれます。その原因は、この人々が自分の業を思い通りに、勝手な意思のまま、まるで我がものように行うからなのです。しかし善 (guot) とはそもそも神に属するものであって、一滴たりともあなたのものではないのです。

ここでも繰り返されるのは〈信徒〉の深き意味である。それは、いかなる執着をも断ち、ひたすら魂の根底へと沈潜して、神の御旨を待ち続けるということである。自己自身に対する執着さえ放棄しなければならぬ。信心業にはげむことから得られる喜びや満足も、そのまま善いものとしてとらえるべきではない。そこに我意が忍び込

7) 『新カトリック大事典』第三巻、研究社、2002年、p. 950。

徳に関しては、トマス・アクィナスは三カテゴリーに分け、信仰・希望・愛を内容とする〈神学的徳〉、知恵・正義・勇気・節制を内容とする〈知的徳〉、さらに賢慮・正義・勇気・節制を含む〈倫理的徳〉としている。この内の〈神学的徳〉が対神徳に相当する。増田祐志編『カトリック神学への招き』、上智大学出版、2009年、p. 242参照。

んでいる可能性があるからである。それなのに人間は、修練を都合よく行ってそのつどの目的に達すると、その達成感に満足してしまう。しかし実はそこに大きな危険がひそんでいるのだとタウラーは指摘する。

この箇所では魂の根底は「ゲミュエテ」と表現されるが、この概念はタウラーでは「グルント」とほぼ同義である。その微妙な違いは、タウラーがグルントよりもゲミュエテの方に、心理学的な色合いを含ませていることである⁸⁾。

⑤ ところで、善そのものと快はいかにして区別できるのかと、問えるかもしれません。例を一つ挙げましょう。旧約の時代には、祭司は生贄とされた肉の脂を食べることが禁止されていました。彼らは脂を焼き尽くした上で神に捧げなければなりません。それでも許可された肉の場合は、中身の脂を食べることができました。

⑥ 同様に、徳と善のための修練から得られる快はどれも、愛の炎に投げ込まれ、本来の所有者である神へと捧げ返されるべきなのです。もともと業そのものに含まれるよい気持ちと満足は、その業が善きものであるならば、素直な心で受け入れてもかまいません。けれども勝手に自分のものにするという不当は許されません。

タウラーは、信心業から得られるいかなる満足や快も、第一に神自身に返すべきだと自覚せよという。その信心業が善であれば、そこから得られる快は受けてもよいと一定認容するが、それでも快を善なる神に帰せず、自分の力で得たものだという私の主張をするなら、罪であるとする。それが、旧約聖書の燔祭のいけにえの例を引き合いにして、述べられる。

⑦ さて「私に従いなさい」という（主の）言葉で、聖マタイは何もかもを捨てて、神に従いました。人間が全てのを捨て、いつでも自分自身を捨てるのなら、彼は外なるひとと全ての徳の修練とあまねき愛をもって、神に従って全てを越えていくはずでず。また自分に何が降りかかろうと、何を投げつけられようと、いつでも真に自分自身を放棄して、内なるひとと（ともに神に従うはずでず）。

説教の中段に至って、タウラーは聴衆にふたたび説教冒頭の聖句と、それが含む意味とを思い出させ、さらなる展開を試みていく。それは、自己の放棄と魂の根底からの浄化の方向性である。

⑧ さて（これから）私のことを語りましょう。ただこれは誰にも関わることです。私は神の恵みと聖なる教会によって、私の修道会（ドミニコ修道会）に入れてもらいました。

8) 橋本裕明『タウラーの〈魂の根底〉の神秘主義』、知泉書館、2019年、p. 69を参照。

そしてこの修道服とこの僧衣を（もらい）、司祭職と教師の身分、告解を聴く資格を（受けました）。

⑨ ところで、教皇と聖なる教会が、私を得たそれらを取り上げようとするなら、私が自己を放棄した人間であれば、理由を聞かずに全てを返します。許されれば、灰色の衣をまとい、兄弟たちと修道院での共同生活が送れないなら、修道院を去り、それ以後は司祭を辞め、告解を聴くこともせず、説教も行わないでしょう。全てを神の名において行い、何も求めません。彼らが私に与えたのなら、私から取り上げる権利もあるからです。私にはその理由を聞く資格はありません。もちろん、異端者 (ein ketzer) 呼ばわりされたり、破門に (ze banne) されたりしないことが条件ですが。

⑩ しかし別の者がその一つであれ奪うときには、私が真に自己を放棄した人間であるなら、奪われるよりも死を選ぶでしょう。さらに聖なる教会によって形式上、ミサ聖祭の挙行が禁止されるなら、その処置を甘んじて受けることでしょう。それでも何びとも私たちから霊的に拝領すること (geistlich zuo nemende; 霊的聖体拝領) を取り上げることはできません。教会が私たちから取り上げることのできるものは、教会が私たちに与えたものだけだからです。だから不平を言わず、逆らわないで、全てを静かにゆだねるべきです。

ここでタウラーは私事を語ると宣言する。彼の場合、このこと自体とても珍しいことである。タウラーは、ゾイゼのように、〈自伝〉とか〈主キリストとの対話〉や〈祈り〉などをまとめたことは決してなく⁹⁾、説教の中でもほとんど自分を秘匿しているのである。そんな彼が、自分に目下迫った危機を語り始める。

ドミニコ会の高名な説教家のタウラーが、その身分を剥奪される恐れとは、いかなることであろうか。それは「ミサ聖祭の挙行の禁止」という言葉から考えられる。タウラーの不安は、やがて自分の住むシュトラースブルク市に〈聖務禁止令〉が下るといふ形で現実のものとなったが、これを命じる権限があるのは〈聖なる教会〉であり、〈司教〉であり、最終的には〈教皇〉であった。ではなぜ、この困難がタウラーたちの帝国都市に降りかかり、同市のドミニコ会は1338年にバーゼル市に移らねばならなかったのか。その原因は、聖権と俗権との確執すなわちアヴィニオン教皇とドイツ王との対立にあった。

1313年に神聖ローマ皇帝ハインリヒ7世（ルクセンブルク家）が世を去ると、弟の選帝侯トリーア大司教バルドゥインは、さっそく次期の国王候補にルートヴィヒ4世（ヴィッテルスバハ家）を立てた¹⁰⁾。それに対しケルン大司教は、フリードリヒ3

9) 例えばゾイゼの『エグゼンプラール』(Exemplar)の中には、「自伝」(Seuses Leben)や「永遠の知恵の書」(Büchlein der Ewigen Weisheit)が収録されている。

10) バルドゥインがルートヴィヒを擁立したのには意図があった。彼はルートヴィヒを暫定的な王と考えており、その後は、王が自家（ルクセンブルク家）のメーレン辺境伯カール4世に譲位するのを期待していた。

世（美王；ハプスブルク家）を候補者とした。ルートヴィヒは翌年ドイツ王に選出されたが、フリードリヒはこれを肯んじず、ついに両者は武力抗争に及んだ。そして1322年にルートヴィヒがミュールドルフの戦いでフリードリヒに勝利した。しかし教皇ヨハネス22世はルートヴィヒを神聖ローマ皇帝に叙せず、それどころか、破門を宣告した。怒ったルートヴィヒはイタリアに兵を送って教皇派の勢力との戦いに及び、結局28年にローマの民衆の支持のもと、神聖ローマ皇帝の帝位を得た（在位は1328-47。1338年には、選帝侯たちは神聖ローマ皇帝の選出に教皇権の介入を許さずという決定に至る）。同年、タウラーの住むシュトラースブルク市はライン諸都市と連合してルートヴィヒ皇帝支持に回り、教皇ヨハネス22世は対抗措置として同市に〈聖務禁止令〉を出した。教皇の意向に従うドミニコ会は市民にひどく敵対視され、そのために同市にとどまれなくなり、1342年までバーゼル市に転任する事態となった¹¹⁾。

この説教は14世紀前半のある年の——もちろんタウラーの司祭叙階後のことであるから30年代以降の——聖マタイの祝日（9月21日）に行われたと考えられることから、〈聖務禁止令〉を下したのはヨハネス22世（在位1316-34）であったはずである。しかしその後のアヴィニョン教皇ベネディクトゥス12世（在位1334-42）、クレメンス6世（在位1342-52）も、ドイツ王に対しては敵対的であった。ただし後者の在位期間の1348年には、友好的なカール4世がドイツ王となるので、一時的に融和関係が生じた（その後、カールは教皇インノケンティウス6世から皇帝に戴冠されて55～78年まで在位する）。

本説教は、内容からして〈聖務禁止令〉以前に行われたものである。タウラー自身が、将来自分に起こりうる、人生の一大事についての〈憂い〉と〈覚悟〉を、一般信徒を含む聴衆の前で開陳したものであったのである。タウラーは叙任権をめぐる聖権と俗権間の抗争から生じる政治的問題については、あくまでもイエス・キリストの自己放棄のあり方を模範にして身を処すと公言する。教会およびその代表である教皇が、自分に対して司祭職の返還を求めるなら、黙って返すと語る。タウラーは教皇にひととおり司祭職与奪の権限を認めてはいる。しかしそれは、現世の運命に神の摂理を読みとっているがために、教会の頂点にある教皇の政策は、たとえ納得できずとも忍耐して受け入れるという覚悟であったように思われる。タウラーはたしかに、ミサ聖祭においてホスチアをキリストの聖体へと聖変化させ、それを信徒に授ける司祭の職権をきわめて重視するが、その根底には、司祭も信徒も、神以外の何もの——それが被造物であろうと自己であろうと——からも解放され自由となって、神と一致したいという、いわば〈霊的聖体拝領〉への切願があるべきだ、と考える。これは教皇が

11) 市村卓彦『アルザス文化史』、人文書院、p. 95参照。この点、フランシスコ会はドミニコ会とはちがいが、皇帝支持に回っていた。

与える外的な司祭職に優先するのである。その意味では、「聖務」はきわめて尊いものではあろうが、何よりも霊的な聖体拝領が絶対的で「聖」であるのである。それは、徹底的な魂の浄化——それは現世では当然不完全ではあろうが——に伴って実現しうる、魂内での神との合一である。タウラーは聴衆に向けて、神との合一の保証は、ミサでの聖体の拝領だけでなく、神に向かう純粹で真実の霊的な態度において、すでに与えられているのだとして、信徒の安心を確保している、とも読める。

こうしてタウラーは、魂の浄化の修練を積み重ねて神との合一に向かう道程こそを第一義とし、それこそがキリストへの〈信徒〉にほかならないことを暗示する。この生き方を身につければ、キリスト者にはもはやそれ以上望むものはない。社会的騷擾であれ天変地異であれ、ペストなどの疫病であれ、何が起ころうとも、それは深刻な現実であってもやはり外的な事象であって、それよりも、魂の浄化を最優先すべきだ、と語っているのだといえよう。

タウラーはまた、聖職者としての身分が神との合一への近道だとは言わない。その意味で、僧位という聖職すら相対化する態度を見せている。フェター第42ではこう語る。「信徒のわれわれは、主が呼ばれ、招かれた役割が何であるか、主が与えられた恵みがどんなものかを認識すべきです。[...] ある人は糸を紡ぐことができ、別の人は靴を作ることができます。[...] 私が司祭でなくて修道院で生活していないのなら、靴を作ることができるのを偉大なことだと思って、誰よりも上手に作ろうとし、自分の手でパンを稼ぐことを望みます。[...] 神から与えられた役目を果たすべきです」¹²⁾。職業に貴賤はなく、誰もが平等である。ただ誰しも、神に向かう生き方の質（霊性の深さ）が問われるのである。

- ⑪ ただしこれは外的な (uswendig) ことです。内的な (inwendig) ことについても同様に、さらにそれ以上に (完全な仕方) で対処しなければなりません。私たちが持っているもので、神が下さらなかったものがありますか。私たちは、神から与えられたものは何でも、自分が一度も受けたことがなかったかのように、自分自身を放棄して、神に返すべきなのです。

ここでタウラーは視線を聴衆に戻し、キリスト者は神から受けたものは、我執を捨てた純粹な思いで神に返さねばならないと述べる。日常生活でのこと（事物、物事）はもちろん、内的な（霊的な）ことにおいては、よりいっそう誠実に対処すべきだとする。

- ⑫ 信徒のみなさん、あなたがたは聖なる形像と黙想と方法と業に従って生活しています

12) Vetter, p. 177.

が、ここからはそのことを検討したり、それについて語ったりはしません。私の話をご自分に関わることだと思わないで下さい。私は暗い道を歩んで、狭い小道を抜けていく特別の人のことを考えています。この生き方は誰にも当てはまるものではありません。この人々は、今まで話の対象にしてきた人とは全く違う仕方です。歩いていかねばなりません。あることを行うが、別のことは辞めるということではなりません。その人々は我意を持たずにそれらを諸能力の内に受けるべきなのです。人間は（低次の）能力を越えた次元で事物を所有してはならず、我意をもっていてもなりません。

⑬ 人間なら誰でも、持ちたい、知りたい、欲しいという傾向がありますが、これは諸能力のはたらきです。

その後タウラーは「信徒のみなさん」と呼びかけて、もとのテーマ説教の流れに話を戻していく。ここで彼は、〈一般信徒〉と〈進歩者〉を区別して、自分は後者に焦点を当てるのだと表明する。そして問題は、何よりも〈我意の克服〉であると明言する。

⑭ ここで、説教の冒頭で触れた六つの点について語りましょう。そのうちの三つは低次の能力の内に、三つは高次の能力の内にあります。低次の諸能力の内には、謙遜、柔和、忍耐があります。高次の能力の内には、信仰、希望、愛があります。

⑮ ところで、信仰ははたらき始めると、理性からその知識の全てを奪い、取り去って、理性を盲目にします。理性はそれを放棄しなければなりません。理性の能力は切り捨てなければならぬのです。同じように希望が現われ、確実さと所有を取り上げます。また愛が現われて、あらゆる我意と所有欲から意志を奪うのです。

⑯ さらにこれから、低次の能力ではたらくものについて語りましょう。謙遜、柔和、忍耐がそれです。それらはこれら三つの能力に対応しています。謙遜によって人間は完全に深淵に沈み込んで名を失い、無そのものに依拠し、謙遜すら意識しなくなります。柔和によって人間は愛に巣くう我意（eigenschaft）を奪うこととなります。そのとき柔和な人間にとっては、全てのもは同等であって、反感を持つことはないのです。その人間はそのために自分が徳を持っていることに気づかず、事物を差別せずに平安の内に受け入れます。徳はすでに身につけてしまっており、もはや徳として意識されることはありません。忍耐の場合もこれと同じです。愛する人々は苦しみを渴き求めるのですが、忍耐することすら意識しなくなるのです。

ここで突然、先述の魂の6能力に立ちもどり、その内容が何であったかを確認する。

その上で、神によって人間に注入される〈対神徳〉の一つひとつのはたらきについて

で説明する。信仰とは理性から知識を奪うものであること、希望は確実さと所有とを奪い、愛は我意と所有欲から意志を奪うものであることを説明する。〈対神徳〉はともに、神との合一に向けて人間の魂の浄めにはたらくものなのである。これらの聖なる徳に人間の倫理的徳が協働する。

低次の能力の「謙遜」は、人間を深淵へと完全に沈み込ませ、名を奪い、無に依拠させ、謙遜すら奪ってしまう。「柔和」は人間から愛を奪い、全ての事物をどれも平等に受け入れる。さらに人間は「忍耐」という苦しみを渴き求めながら、ついにはそれすら意識しなくなる。タウラーは、これらこそが徹底した〈自己否定〉のありよう、すなわち自己の存在がとどのつまりは無であるということの覚りに導くのだと結論する。

⑰ 愛する子よ、この自己の放棄を完全に身につけても、実際のところ、なおもひどく無慈悲な言葉が口をついて出てくるかもしれません。だが驚いてはいけません。神はあなたの善となるようにと、あなたがもっと深く自分の無に沈み込むように定めておられるのです。ときには怒りが生まれるかもしれません。この全てはあなたをいっそう徹底した自己の否定に導きます。この全てはあなたが自分の無を完全に悟るようにさせるのです。それゆえあなたは、自分は神が善き考えを送ってくださるのに価しないと思うのです。そのとき何よりも大切なのは、無窮の無へと限りなく沈むことです。この人々は、外的業や信心や形像にもとづいて行っているではありません。信徒のみなさん、まだこの次元まで達していないなら、熱心に修練すべきです。あなたがたが煉獄（の苦しみ）を耐え抜いたなら、神は罪を赦して、天国を与えてくださるでしょう。しかし確かなことですが、今のあなたがたのやり方ではそこまで達することはできず、この人々の下僕にすらなれません。しかしこの人々が上首尾に進むのなら、彼らの本性は限りなく喜ばしいのです。もちろんその歩みには大きな危険がつきものであり、その道は世間の道とはひどく異なり、とても暗くて知ることでできないものです。それは、すでにヨブについて語ったように、道はその人々には隠されており、闇に包まれているからです。この荒れた道を行く人々は誰でも、何が常に示されようとも、自分を否定していなければなりません。そのとき主はこう言われるでしょう。「私に従いなさい。全てのものごとを通り抜けていきなさい。私はその事物とは異なるものなのだ。前に進みなさい。私に従って歩を進めなさい」と。すると人間は「主よ、あなたはどなたですか。どうしてあなたに従って、淵や荒地や異国に入って行かねばならないのでしょうか」と答えるでしょう。主はそれに対して「私は人間であり、神であり、神をはるかに超えた者である」と言われます。今や主に対して、人間が本質的な知られたグルントから、「私は無です、無よりさらに無であるのです」と答えることができるなら、子らよ、彼はほぼ完成の域に達しています。名を超越した神性は、最深の否定のグルントの外には、はたらくべき本来の場を持っていないからです。

師たちはこう書いています。新しいかたちが生まれるためには古いかたちは完全に消えるべきである、と。さらにこうも言っています。子が母の胎に宿るとき、最初は単なる物体である。しかしその後、その物体に動物の物体が注入されると、その物体は動物として生き始める。そして前もって定められた時間が経過すると、神は知性的な魂を創造して、その物体に注入する。すると、とたんに最初のかたちが全て消滅する。そうしたかたちに相応したはたらき方と考え方、大きさと色は、もろともに消え失せる。この全ては完全に無くなり、純粹で裸の基盤という可能性だけが残されるのだ、と。私も同じように、人間はここで超本性的な本性によって変容させられるべきなのだ、と言います。そうなれば、これまで諸能力で受けた全てのかたちは、消えざるを得ないことになります。能力も、知識も、意志も、活動も、事物の対象化も、体験も、独自性も（そうなるのです）。聖パウロが無を見たときには、神を見たのです（Do S. Paulus nút ensach, do sach er Got）。エリアはそのために、主が来られたときに目をマントで覆ったのです。

タウラーは、この道は熱心に追い求めるべきではあるが、万人向けの道ではないと断言する。その道を進む歩みには常に「大きな危険」が伴うのであり、またそれは「暗くて知ることでできない」道なのだとする。ただし人間がいつか魂のグルントから、自分が無にすぎず、さらに無を超えた無にほかならないと悟るようになったら、その〈進歩者〉は〈完成者〉の次元に達しているのだと述べる。そこでは名を超えた神性が、「最深の（自己）否定のグルント」において自らのはたらきの場をもつことになるからである。

タウラーはここで「師たち」と言って、アリストテレスおよび彼の思想に基づくトマス・アクィナスの質料形相論をふまえて、消滅と生成の相互関係に言及しており、結論として、人間の諸能力がとらえた全ては、人間が「超本性的な本性」のはたらきによって変容をこうむると、消えざるをえないのであると語り、使徒言行録9章8節におけるパウロのことばである「無を見たときには神を見た」を引用する。

⑱ この時点で、全ての堅い岩は砕かれます。霊がその上で安らごうとするものは皆、ここで取り払われねばなりません。この全ての形が霧消したら、たちまち霊は変容させられます。だからあなたも前進すべきなのです。これについて天の御父は、霊に対して、「あなたは私を父と呼ぶべきであり、内に入ることをやめてはならない」と言われました。あなたはさらに内に入るべきです。あなたがどんな仕方も形像も形式も越えた、知られず名づけられない深淵へとさらに完全にさらに深く沈めば沈むほど、全ての能力を越えて自分自身を失うことになるでしょう。そしてこの中で完全にかたちを失うなら、この喪失において、本質的な意味で自分自身を支える一つのグルント、一つの本性（ein wesen）、一つの生命（ein leben）、全てを超える一（ein úber al）だけがあることでしょう。ここから

言えるのは、そのときの人間には、能力も、愛も、はたらきも、霊も欠けているということです。そうなるのは、人間の生来の特性のためにではなく、創造された霊が限りなく自己を喪失し、限りなく自己を放棄したことで、神ご自身が自由な善にもとづいて、創造された霊に変容をお与えになられたためなのです。この人間とは、神がその内でご自身を認識され、愛され、楽しまれる人々です。神とはまさに、一つの生命、一つの本性、一つのはたらきだからです。それに対して、自由を乱用し誤った光でこの様子を見る人々は、この世で最も危険な事態に陥ります。この目標に至る道程を進むということは、主イエス・キリストの高貴で尊い生涯と苦難を通り抜けることでなければなりません。主は人間が通り抜けていくべき道であり、この道を照らすべき真理であり、人間が到達すべき生命だからです。主は門であり、これとは別の門を通して入る者は殺人者なのです。人間はこの愛すべき門を通り抜けて自然本性を突破し、謙遜と柔和と忍耐において徳の修練を積んで歩んでいかねばならないのです。まことに、このように歩まない者が最後には道を外れてしまうのは、確かなことなのです。また、その道を歩むことのない人々の前を神が歩んで行かれ、彼らの間を通り抜けて行かれたとしても、彼らは盲目のままです。

そしてタウラーは〈変容〉の内実を語るが、これは偽ディオニシウス・アレオパギタのごとき表現である。人間が、あらゆる仕方、像、形式をも超越した次元、すなわち知られることもなく名も付与できない内なる深淵へと沈下していくと、自分自身を失ってしまうことになる。しかし、まさしくその喪失を契機として、神性という「全てを超える一」に依拠することになるわけである。

タウラーはそのさい、こうして生起する真の〈合一〉を、不正な自由の立場に身をおき、偽りの光に照らされて、自己流に解釈する者たちがいることを指摘する。それは、当時危険視されていた自由心霊の兄弟姉妹のセクトである。このセクトは、人間が救われるためにはイエス・キリストの救済の業あずかに与らねばならないとする正統信仰の立場を否定し、救世主のはたらきそのものを不要とする独自の修練を行っていたわけであるが、タウラーはそれを厳しく批判する。神との〈合一〉というキリスト者の最終目標に到達するには、人間はイエス・キリストの苦難の生を、まさしく自分自身において追体験しなければならない。それは自分自身の〈自然本性〉を突破し、謙遜と柔和と忍耐の徳において修練を積み重ねていく、長い年月を必要とする〈信従〉の道なのである。何びともキリストの足跡から離れてはならない、というタウラーの主張がここでも示されている。

①⑨ この道を進む人々に対しては、教皇はどんな力も行使できないのです (enhat der babest enkeinen gewalt)。神が彼らを解放されたからです。聖パウロは、「神の霊にかり立てられ、導かれる人々は、いかなる掟の下にもいない」と言っています。この人々に

とって時間は決して長すぎることはなく、彼らも長いと文句を言うことはありません。この忍耐は、この世を愛する人間には決して与えられません。彼らは文句を言い、待つ時間が長すぎると考えています。しかしこの状態にある人々は、最上の部分では時間を超越し、最低の部分では解放されていて、自己を放棄しています。だから何が起ころうと、（魂は）本質的には平和のままです。彼らは全てのものを神から受け、全てのものをそのまま神に運んで返すのです。外的なひとがひどく苦しんで動揺することになっても、神の全ての計らいを信じて平和のうちにとどまります。これこそが幸いなる人間です。彼らは今いる場で賛美されるべきです。しかしその数は決して多くはありません。

タウラーは先ほどの、教皇の権限に立ちもどり、「神の靈にかり立てられ、導かれる人々は、いかなる掟の下にもいない」というパウロの言葉を後ろだてにして、教皇が有する宗教的権限にも限界があることを、公然と主張する。イエス・キリストに純粹に信じて、自己の魂を浄化する修練にはげむ、いわば信仰の〈進歩者〉に対しては、教皇は「どんな力も行使できない」というのである。それを実践している一例が、タウラーやハインリヒ・フォン・ネルトリンゲン、ルールマン・メルスヴィンなどが司牧した靈的共同体である「神の友」に他ならない。さらに、修道女やベギンの中のとりの熱心な修道者たちである。彼らは少数派であって、自分の所有は全て神から恵みとして与えられたものであるから、いったん神からの求めがあればただちに素直に返すという、無執着の生き方を身につけており、それゆえ魂は自由で拘束を受けておらず、〈平和〉であるのである。

㊿ 私たちが主の後をそのように歩んで、実際にこの純粹な善に達することができますように、主に願ひましょう。アーメン。

タウラーは、この幸いな人間となって「純粹な善」である神性^{あずか}に与えるように、すなわち〈神との合一〉に至ることができるようにと祈願して、説教を結ぶ。

II. 在俗司祭ハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンの1347年末の手紙¹³⁾

ハインリヒは、帝国都市パーゼルからマルガレーテ・エプナーに宛ててこう書いた。

[...] 私は主に反する生き方をするなら、むしろ死ぬことを願ひます。事実、神の手は、数え切れぬほど多くの、何千もの人々を予期せぬ死で撃たれたのです。その手は我々にあと五マイルまで (bis an fünf meil) 近づきました。私はそれゆえ、自分がそれをして、神の怒りをもはや恐れぬことに驚いています。私は、死がいつ、どのように、どこで訪れ

13) あるいは1348年の初頭ともされる手紙。

でも、我々が神のうちにあることを願います。[...] 新しい王をあなたは「私の王」ではなく、キリスト教徒の王と呼ぶべきです。我々の偉大なる女性の友、シュトラースブルクのメルスヴィン女史は、あなたに黒衣と肩衣に使う白い布を送ってくれています。どうか神に対して、彼女と、あなたの信実の使い (dein getrüber bot) である我々の愛すべきタウラー神父のために、願って下さい。タウラー神父はたいへん大変な苦難のうちに (in groszem liden) あります。それは彼が真理を教え (die warhait lern)、[...] 真理に完全に沿って生きている (ir leben als gantzlich) からです。[...] 私の心は以前ほどゾイゼに傾いてはおりません。¹⁴⁾

この手紙は、14世紀中葉の時代状況を反映するさまざまな情報を含んでいて、興味深い。手紙の差出人のネルトリンゲン出身のハインリヒは、タウラーやゾイゼの同時代人であるが、正確な生没年とも不明である。1310頃の誕生で87年以前の死亡が伝えられている¹⁵⁾。W・エールはこの両神秘家と比較するとハインリヒは思想的に劣り、またその柔弱な性格からして——この判断の根拠は数十篇におよぶ手紙によるのだろうか——彼を「二流」の人物と考えている¹⁶⁾。実際にタウラーとともに「神の友」の霊性運動に積極的に関わり、熱心な教導を行った事実は知られているが、彼自身の思想を評価できる文献資料は残念ながら残されていない。しかしベギンで女流神秘家であったメヒティルト・フォン・マクデブルクの『神性の流れる光』を筆写して残した功績は、神秘思想史上、実に大きい(オリジナルが伝承されていない分、それはいっそう重要である)。また彼はドミニコ会修道女でやはり神秘家のマルガレーテ・エプナーに魂の体験を記録として残すように勧め、『ヴィジオーネン』(Visionen)の書の成立に尽力した。この修道女とは二十年以上に及ぶ霊的交流があり、多くの手紙——ただし編を除いて全てがハインリヒからのものである¹⁷⁾——が残されている。説教司牧に関してはバーゼルでも人気があったとされ、相当の影響をもっていたと判断できる。

そうしたハインリヒであったが、在俗司祭であるとはいえカトリック神父として、タウラー同様に聖俗両権力の対立の犠牲となったのであろうか、生涯固定した小教区をもたず、巡回説教家として活動して終わったようである。残された彼の1351年の手紙はマルガレーテ宛てのものであったが、残念なことに、受取人の修道女はすでにこの世の人ではなく、届くことはなかった。エールはその後、ハインリヒはクリスティーナ・エプナーにマルガレーテの代わりを見いだしたとしているが、もはやひんぱんな文通は起らなかった

14) タウラーとゾイゼの関係を理解する資料はない。ただハインリヒ・フォン・ネルトリンゲンは、手紙で、タウラーがゾイゼのラテン語著作『知恵の時祷書』(Horologium sapientiae)を所蔵していたと述べている。

15) 死亡年については50年代という異説もあり、不確実である。

16) Vgl. Wilhelm Oehl, Deutsche Mystikerbriefe des Mittelalters 1100-1550, p. 299.

17) マルガレーテの手紙は、残念ながらほとんど残されていない。

た。最後の手紙以後の彼の消息は分からず、その没年も不明である。

さて引用の手紙であるが、この執筆年の翌年はバーゼルを含めて南ドイツをペストが襲った年として記憶されている。エールは、ハインリヒが報告する「予期せぬ死で撃たれた」数千人にもものぼる人々とは、黒死病に罹患した人々を指しており、ハインリヒはこの出来事を神の〈怒り〉の発現だと解釈しているが、これは当時の人々の考えであった。時代は、最後の審判に近い〈世紀末〉の様相を呈していた。バーゼルでは、1348年夏には一万四千人の人々が命を落としたとされる¹⁸⁾。そこからペストは北方に向かっていくので、シュトラースブルク市での死者数もかなりの数に上ったと想定できる¹⁹⁾。14世紀の前半のドイツは、まずは寒冷気候が全地をおおって大変な凶作となった。その後は40年代を迎えると、ドナウ、ライン両川が氾濫して大被害をもたらし、48年にはバーゼル市まで揺らす地震がオーストリアに起こった。そして同年、短期間でヨーロッパの人口の三分之一を消滅させた疫病のペストが押し寄せたのである。また、この疫病の蔓延と関連してユダヤ人ボグロム（虐殺）が頻発し、この時代を〈世の終わり〉だと解釈する鞭打苦行者たちが集団となって、諸都市を経めぐって行ったのである。

しかしタウラーの残された説教では、先に見たように、聖俗両権力間の抗争を暗示しているものの、この深刻な社会状況も人々の悲嘆についても、ほとんど報告されていない。ハインリヒ当人の驚愕や不安と比べて、その違いは明確である。もちろんそのことは、タウラーが時代に対して無関心であったことを意味しない。しかし彼にとっては、自分が何よりもなすべきことは人々の魂を神の霊との合一に導くことだ、と考えていたからだろうと推測される。それ以外に理解することは難しい。

また手紙では、マルガレーテに対して、「新しい王をあなたは〈私の王〉ではなく、キリスト教徒の王と呼ぶべき」だと述べている。ここでいわれる王はカール4世のことである。カールは1346年にドイツ王、55年に神聖ローマ皇帝に叙されているからである。ハインリヒは以前——おそらくカトリック司祭であることから——自分はヨハネス22世にくみ与すると表明していたが、マルガレーテはルートヴィヒ4世の側につくと述べて、霊父と霊子という関係でありながら立場を異にしていた。しかしカール4世はルートヴィヒのよ
うな教皇庁との対立を望んでおらず、教皇も彼を神聖ローマ皇帝として認めていた。それもふまえて「キリスト教徒の王」であることを強調したのだろうと判断できる。これについてタウラーは、残念ながら意見を表明していない。

さらに文面のメルスヴィン女史とは、タウラーがバーゼル市から帰還後、シュトラースブルク市で知り合い、その後霊的父として司牧したルールマン・メルスヴィンの夫人で

18) クラウス・ベルクドルト『ヨーロッパの黒死病』、国文社、1997年、p. 119参照。

19) フリッツェ・クローゼナーの『大ペスト』では、「毎日ひとつの教会で七人、八人、九人、十人かそれ以上の人が修道院墓地あるいは救貧院墓地に埋葬された。しかし死者の数があまりにも多くなり埋葬用の古い墓では小さすぎるようになったので、救貧院墓地を教会から大きな庭園へ移した」と述べられていることを、ベルクドルトは紹介している。上掲書 p. 120参照。

あったと推測される。ルールマンは回心後に聖ヨハネ騎士団に土地を提供し、タウラーとともに「神の友」共同体をけん引した人物である。著書として『九つの岩の書』という編集本も残した。

ところでハインリヒが手紙で、タウラーの現状を指して、「たいてい大変な苦難のうちにあります。それは彼が真理を教え、真理に完全に沿って生きている」からだと述べている点が、興味深い。この〈大変な苦難〉にどれほどの内容が含まれているかは、厳密に推し量ることができないが、タウラーがキリスト信従と魂のグルントの浄化を教えていれば、それは当然前以て自分自身に強いて生きているわけであるから、その修練は当のタウラーにとっても決して生易しいものではなく、厳しい道であったにちがいない。また彼の否定神学的立場の神秘主義的教導が、多数派の聖職者の肯定神学的司牧とは相容れないために理解されることが少なく、直接的か間接的に何らかの妨害を受けていた可能性もある、これについてはフェター第2にこういう言葉がある。

「聖なる教会の長上の生き方は、ほんらいヨゼフのごとく（神に対して謙虚に身をかがめるよう）であるべきです。司祭、司教、修道院長、男子共同体長、女子共同体長、全聴罪司祭は、若い後継の牧者であるべきです。[...] 各長上は下の者の益を考えて指導すべきです。私（タウラー）には共同体長、管区長、総会長、教皇、司教が一人ずつおり、彼らは私の長上です。その彼らが一緒になって私に悪をなそうとし、オオカミとなって私を咬もうとしても、それが数百人でも、私は耐えて、従順に身を伏して耐えるつもりです。[...] 耐えて自分を放棄します。」²⁰⁾

まさしく我意克服による魂の浄化こそが、タウラーの神秘主義的司牧の根本的立場であった。

最後のゾイゼについての記述であるが、ハインリヒは以前から神秘家のゾイゼを崇拝し、一度は会おうとして実際にコンスタンツ市を訪れていた（ただし会えてはいなかった）。ところが周知のように、ゾイゼは晩年とある女性との間の醜聞が伝えられた。ハインリヒはそれによって一度にゾイゼへの関心を失ったようである。もちろんその後、このスキャンダルに関するゾイゼの潔白が証明された。ハインリヒがゾイゼを信頼し続けられなかったのは、まことに残念なことであった。

タウラーの説教に現れた神秘的靈性については、史的批判版が編集途中で、刊行にまで至っていないが、フェルディナンド・フェターの努力により81編を収集した印刷本がある。現今の研究でも、これが彼の思想を知る上での標準テキストとして使用されている。

しかしタウラーの時代認識を知るには、ほとんど文献がない。本稿ではそのわずかの資料に基づいて若干の考察を試みた。

20) Vetter, p. 15.